
人造人間キカイダー対超人機メタルダー & 人造人間ハカイダー

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人造人間キカイダー対超人機メタルダー&人造人間八カイダー

【Nコード】

N0800Z

【作者名】

ジャン

【あらすじ】

良心を持つロボットと自省を持つロボット・生きる意志を持つロボット。

孤独と悲しみを持ったロボットは彼らと出会い何を見るのか・・・

第一話 超人機との出会い

山中

「・・・・・・・・」

土砂降りの雨の中一人の青年は彷徨っていた。

青年の名はジロー。またの名を人造人間キカイダー。

機械でありながら良心回路・ジエミニイを持ち、更には服従回路・イエツサー

善の心と悪の心を持ち人間と同じように苦しむ存在。

そしてその手は何人もの兄弟を殺してきたという罪悪に駆られていた。

「・・・・・・・・」

ダークをそしてシャドウを倒したにも拘らずジローは終わることの無い罪悪の念に囚われながらその日を過していた。

数日後

街を彷徨つ中ジローは何かの音を感じ取った。

「・・・え？」

音楽に導かれながら公園に来たジローが見たのは青いジャンパーを着た長身の青年だった。

ジローにはすぐ分かった。

(彼はロボットだ・・・)

「ん？」

サックスを置きジローに振り返る青年はジローに問いかけた。

「君は？」

「え？・・・ああ・・・僕はジロー・・・その・・・いい音楽だね」

「・・・ありがとう」

ジローの言葉に青年は笑みを浮かべる。

「・・・音楽が好きなのかい？」

「え？・・・うん・・・」

青年の言葉にジローは俯きながら答えると青年は笑いながら続けた。

「僕も好きだよ・・・楽器は？僕はサククス」

「・・・僕は・・・ギター・・・」

「へえ・・・聞いたみたいな」

青年の純粋な目を見たジローは。

(彼は・・・ロボットだ・・・彼にはそう言うプログラムが施されているんだ)

そう思ってしまうジロー。

その時だった。

）
）
）

突如響き渡った忌まわしい音。

プロフェッサーギルのロボットを操る笛の音。

たちまち頭を抑え始めるジロー。

「！！・・・ぐう！！う！！」

笛の音に苦しむジロー。だが青年を見た瞬間驚愕した。青年には何も起こっていないからだ。

「君は……一体……ぐ!」

苦しみ続けるジローに青年は……

「心を強く持つんだ……心を信じて……」

青年の言葉に苦しみもがくジロー。体内の良心回路と服従回路が戦いを起こしている。

「!」

すると青年がジローの異変に気づき音の原因を破壊した。

「ぐ……う!」

一度起動してしまった服従回路の苦しみにもがき罪悪感に駆られるジロー。

すると

そんなジローの元に蠅螂型のロボットが襲来した。

「くくく……キカイダー……苦しみもがけ……そして徹底的に破壊してやる!」

「貴様は……ダークの残党」

「お前を壊し！！我がダークの無念を晴らしてみせるぞ！！」

螻蛄型ロボット・マンティスはジローに襲いかかるうとしたその時。

「！！！」

青年のキックがマンティスを吹っ飛ばした。

「！！！」

青年の力を見たジローは驚いている。並みのロボットにダーク製ロボットを倒す力など無いことに。

「貴様の目的は彼か・・・だが・・・そんな事はさせない！！」

構える青年。

「風よ・・・雲よ・・・太陽よ・・・僕に力を貸してくれ・・・」

青年の心に熱い魂が駆け巡り・・・

「怒る！！！」

雷鳴が駆け巡った。

青年・剣流星の体内に秘められた全エネルギーが・・・

感情の高まりと共に頂点に達した時

彼は

超人機メタルダーに瞬転する。

「!!!」

流星の姿が変わったことに驚くジローとマンティス。

「貴様はキカイダーではない・・・貴様は一体!!!?」

「・・・メタルダーだ」

マンティスに向かって構えるメタルダー！。

第二話 壮絶！人造人間対超人機

第二話 壮絶！人造人間対超人機

静かな公園で向かい合う二人の人造人間と一人の超人機。

「メタルダーだと・・・」

メタルダーの姿を見て驚愕するマンティス。

「何故だ・・・何故貴様にはギル様の笛が効かない!?」

マンティスの言葉にメタルダーは答えた。

「そんな物に僕は負けない!!」

その言葉に焦りを感じたマンティスはメタルダーに斬りかかった。

「く！死ぬ!!」

「りゃ!!」

マンティスの鎌を避けるメタルダーは得意の拳法でマンティスに飛び掛る。

「うおおおおおおおおおおおおおお!!」

マンティスの鎌の乱れ打ちが放たれると瞬時にスキャンし鎌の軌道を見切る。

そして

「うおおー!!」

古賀博士の形見である短剣でマンティスを貫いた。

「ぐー!!うおおおおおおおおおおー!!」

爆発するマンティス。

そしてメタルダーはジローに駆け寄った。

「大丈夫かい？」

「!!」

メタルダーが駆け寄った瞬間ジローの拳がメタルダーに襲い掛かった。咄嗟に受け止めるメタルダー！

「何するんだ!？」

「見つけた・・・」

そう呟きジローはメタルダーに襲い掛かり続けた。ジローは本気で
ある。

「チエンジー!!」

ジローがスイッチを入れた瞬間ジローの姿が変わった。

全身が真っ赤の悪の戦士・キカイダー。

「!!!」

「俺は・・・お前を破壊する・・・死ね!!メタルダー!!」

「ぐ!!」

容赦の無いキカイダーの攻撃を受けるメタルダー。

「ダブルチョップ!!」

「メタルトルネード!!」

キカイダーの上からのダブルチョップを下からメタルトルネードのキックで受け止めるメタルダー。

着地したキカイダーは破壊光線をメタルダーに向かって放つがメタルダーは咄嗟に避けるが余波で痺れてしまう。

容赦の無いキカイダーの攻撃にメタルダーは・・・

(何故だ・・・何故彼の攻撃はこんなにも悲しいんだ)

キカイダーの攻撃から悲しみを感じ取った。

すかさずキカイダーはメタルダーにむかって拳を突き出すがメタル

ダーは丁寧を受け止めた。

「・・・遊びは終わりだ・・・!!！」

キカイダーは跳躍し両腕にエネルギーを集束させた。

「電磁エンド！」

メタルダーに向かって腕を振り下ろすキカイダーに・・・

「メタルボンバー!!！」

回転しキカイダーに体当たりし技が相殺されると倒れるキカイダーとすかさず立ち上がるメタルダー。

「レーザーアーム!!！」

右腕にエネルギーを集束させキカイダーに向かって走り出した。

「いやー!!！」

レーザーアームがキカイダーの頭部を捉えようとしたその時。

(・・・僕を・・・殺してくれ・・・)

「!!！」

キカイダーの思考を感じ取ったメタルダーはレーザーアームを頭部ギリギリで止めてしまった。

そしてそのまま去ろうとするメタルダー。

「き！貴様！何故攻撃を止めた！！？俺はお前を破壊しようとしたんだぞ！！！」

キカイダーの言葉にメタルダーは静かに答えた。

「・・・命だ」

「え？」

「たった一つの命だ・・・粗末にするな」

メタルダーの思考が理解できないキカイダー。それは正に人間の心だった。

「貴様・・・何故だ何故そんな人間のようなことを・・・」

「種族なんて関係ない・・・僕は僕だ」

剣流星の姿に戻り去っていく姿を見たジローは・・・

「教えてくれ」

「？」

「君は苦しくないのか？人間の心を持っていることが・・・」

「・・・無いぞ・・・」

優しい笑みを残して去っていく流星。

「何故だ・・・唯のロボットが何故あんなに優しい心が持てる・・・彼も僕と同じで人間の手で・・・けど彼はそんな事を思っていない・・・どうしてどうしてなんだ!!」

残されたジローの叫びを・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

大型のバイクに乗り黒いアーマーのような服を着た男が見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0800z/>

人造人間キカイダー対超人機メタルダー&人造人間八カイダー

2012年1月6日13時48分発行